kewaishi
化粧師
人生を変える、化粧があります。
椎名桔平
菅野美穂
池脇千鶴
佐野史郎
柴田理恵
柴咲コウ
大杉漣
菅井きん
岩城滉一
小林幸子
岸本加世子
田中邦衛
いしだあゆみ
監督：田中光敏
第14回東京国際映画祭 最優秀脚本賞受賞作品
エグゼクティブプロデューサー：河端 遼 プロデューサー：藤田重樹 遠藤淳一 原作：石ノ森章太郎（「化粧師」小学館 ビッグコミック刊）
脚本：横田与志 音楽：大谷 幸 撮影：浜田 毅 美術：西岡善信 照明：渡邊孝一 録音：武 遼 編集：川島章正
助監督：猪腰弘之 記録：松澤一美 俳優担当：前島良行 ラインプロデューサー：坂本忠久/酒井 実 音楽プロデューサー：石川 光
「化粧師」製作委員会：イオン化粧品 読売連合広告社 東映CM 製作協力：フィルムフェイス 配給：東映 www.kewaishi.com

心までチャーミングに化粧するKEWAISHI（化粧師）小三馬

文・おかむら良（映画評論家）

まだ子供の頃、母のオシロイ（白粉）で好きな人形に化粧をし、
ついでに自分の顔も真っ白にしておこられた。
高校時代のデートでは、母のピンクの口紅で背伸びをした。
大学の入学式前には自前の口紅を買った。
でもファンデーションを塗り、アイラインを引き、口紅を塗る、本格的な化粧を初めてしたのはいつだったかしら……。
呉服屋の女主人と芸妓を除くと、この作品に登場する女性たちはみんな初めて化粧をする。
彼女たちはとても幸せ。なぜなら間に合せの化粧品や試供品ではなく、小三馬というプロの手でしてもらうのだから。
彼女たちはちょっと緊張し背筋をのばして鏡の前に座り、
きれいになっていくことを確かめながら、今までと違う新しい自分と出会う。
こんな感動があれば初めて化粧をした日のことも、その時のドキドキ感も、いつまでも覚えているだろう。
「お化粧をしてもらって、もうひとりの私がいるんだってわかったんだよ」
化粧で変わった光夫の母の藤子は、とまどう夫に向かってこんなことを言った。
毎日を母として妻として必死に生きてきた藤子は、小三馬の化粧で眠っていた女の部分に光をあてられて、やさしく変わっていった。
見合いをする純江や劇団の受験写真を撮る時子は、小三馬に化粧をしてもらいながら、
心の中の複雑な想いを整理して、新しい人生に向かって歩きだす覚悟を固めていく。
今風に言えば人気のメイクアップアーティストということになる化粧師（KEWAISHIと読みます）の小三馬は、化粧を通して女性たちを変えていく。
彼は、あなたの中にはこんなあなたもいるよ、あなたにはこんな女性に変身する可能性があるよ、ときっかけを作ってくれる。
小三馬は変身の入り口までは連れていってくれるけど、そこから先は「心に化粧するのはあなた自身」と
クールに言い切って、自分で成長していくしかないんだよと背中を押す。
人は誰でも自分を知っていると思いたいけれど、自分が知っている自分なんてほんの一部という気がする。
だから生きることにも恋することにも好奇心いっぱいのわたしたち女性は、
化粧をすることで心までチャーミングにしてくれる小三馬に出会いたい。

忘れかけた美心を…

Bijin

“もっと美しく、もっと輝きたい”…それはいつの世にも変わらぬ、女性の飽くなき願望。
この映画『化粧師』は、そんな女性たちの願いをかなえ、心まで癒してくれる物語。
今は使われなくなった美しい日本語、化粧<けわい>…その意味は、頭の先からつま先まで女性を美しくすること…（人の内外面まで気を配ること）。
人の心を豊かに化粧(けわい)していく化粧師・小三馬を演じるのは椎名桔平。
彼を取り巻く女性たちには、菅野美穂・池脇千鶴・柴咲コウの若手から、
いしだあゆみ・柴田理恵・岸本加世子・小林幸子・菅井きんなどのベテランまで、彩りも鮮やかな女優陣が顔を揃える。
そして田中邦衛・佐野史郎・岩城滉一・大杉漣ら演技派俳優陣がさらなる味わいを加えていく。
小三馬にかかわる女性は、「化粧」によって力を与えられ、生き方に対する大きな影響を受け、前向きに羽ばたいていき、
そして、感情までも豊かに描かれていく。21世紀に生きる女性たちへの応援歌である。